

ややこしい
ややこしい

～喫茶店と
カフェ～

芳田尚哉

喫茶店とカフェ

「昨日な、あの雑誌に載った喫茶店に、茶しばきに行ってきたねん」

男は若い男に自慢げに言った。

「ほんまですか」

オシャレな店として載っていたその店は、どうも男のイメージと重ならない。

「ほんまや。なんやったかな、あの見せの外で飲むやつは」

「……………オープンテラスですか？」

若い男は首を傾げて考える。

「それやそれ。オープンやオープン。そこで飲むビールは格別やな」

「昼間っからビールですか。って、それって喫茶店やのうてカフェですやん。雑誌に載ってた喫茶店言うから、あの水出しコーヒーが旨いっていう店かと思いましたやん」

「そこやないって。その隣に載ったとこや。その店、アルコールがあらへんみたいやったからな」

「そら喫茶店ですから。兄さんが行ってきたのは喫茶店やのうてカフェやから」

「そんな軟弱者っぽい言い方すんなや。横文字使ってオシャレに言わんと、ちゃんと漢字使えや」

「そんなんちゃいますって」

どういう理屈なのか不明すぎてため息を吐く。

「喫茶店とカフェは別の店ですよ」

「そら名前がちゃうしな。せやけど、どっちも茶しばきに行くところやろうが」

「その認識はどうなんかと思いますけど、全然ちゃいますからね」

「相変わらずお前は、わけわからんことぬかすな」

「兄さんこそ相変わらずですやん」

若い男も負けじと言い放つ。

「なんや、なにがちゃう言うねん。外観か？ 見た目が古臭いのが喫茶店で、オシャレでハイカラなんがカフェなんか？ ナウいやつがそうなんやろ」

男はこれでどうだとばかりに言う。

「その理屈はなんですのん。レトロな雰囲気のカフェやっていますやん」

「なんやねん。屁理屈ばかりやんけ」

「屁理屈ちゃいますって。お酒を出せるのがカフェで、アルコールがないのが喫茶店なんですって」

「アルコールみたいなもん、どこでもあるやんけ」

「そりゃ、兄さんが普段行くのはそういう店ばっかですけどね。アルコールを出そうとしたら許可とか色々ありますねんて」

「そんなん誰が決めてん」

「国です」

「……………」

若い男の即答に男は言葉を失った。

「そんなん知るか！」

ヤケクソとばかりに声を荒げる。

「おがらんといてくださいよ」

「どうでもええねん。問題はな、お前があの店が喫茶店やない言うことなんじゃ」

「なんでそうなるんですか。兄さんはビールを飲んだんでしょ？ せやったらカフェや言うてるだけですやん」

「喫茶店や」

男は頑として聞き分けない。

「ちゃんと聞いてもらわんと。アルコールを出すのがカフェで、出さへんのが喫茶店なんですって」

「誰やねん、そんなん決めたんは。それも国なんか」

「そうですね……ヨーロッパのどっかの国ですわ。フランスやったかな」

「仏蘭西か。あの猪口才な国め。オシャレな感じばっかやんけ」

完全に八つ当たりの罵倒だ。

「フランスとは国交が盛んですさかい、あんまり国際問題になりそうな事はしたらあきまへんで」

若い男はとりあえず宥める事にした。

「そんなんどうでもええねん。あそこは喫茶店や」

「もうどっちでもええですわ」

男は諦めてため息を吐いた。

F i n o .

ややこしいややこしい～喫茶店とカフェ～

<http://p.booklog.jp/book/110256>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110256>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト